
続 明るいホラー

イボヤギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

続 明るいホラー

【Zコード】

Z8269M

【作者名】

イボヤギ

【あらすじ】

昨年の「夏ホラー2009」怖い話は好きですか?」に出品し、惜しくも論外だった拙著の「明るいホラー」。これに気を良くし、さらに今回の「夏のホラー2010 百鬼集帖」にも参加する私。そのタイトルはもちろん、「続 明るいホラー」「W 怖くないのがミソ」。

陽は昇つたばかり。まだおそらくは一部の人間しか目覚めていない、そんな時間、パジャマ姿の男が渋い表情で布団から起き上がった。そして窓辺に近づき、無造作にカーテンを開け放つた。

薄暗い部屋を包むよどんだ空気とは、対照的な生まれたての朝の

光　　彼は思わず目を瞬かせ、

「お、今日は晴れているのか」

そうつぶやいて、一瞬だけ表情を和らげた。けれども、それはすぐ元の険しい顔つきへと戻っていく。

たとえ、晴れだろうと雨だろうと　天気がどうであろうと、世の中の景気がどうであろうと、世界が平和であるうとそうでなくうと、部屋の外に広がるもの変化は、彼にしてみればたいしたことではなかつた。

「……はあ」

ここ数年来、毎日眠りは浅かつた。それなのに、朝は早くに目が覚めてしまう。まずはおもむろにカーテンに近づき、天気を確認し、やがて大きな溜め息を一つだけつく　この一連の動作で、彼の憂鬱な一日は始まるのだった。

「パパ、今日は遅くなるの？」

その言葉に、玄関で靴を履いていた男の動作が止まつた。そして反射的に、少し強張った顔で振り返る。最近はほとんど残業はしていないし、ここ数年は同僚らと飲み歩くことなども皆無だった。

「え？　どうして？」

それに、女は間髪入れず、

「だつて今は晴れてるけど、また、夕方あたりにゲリラ豪雨がくるらしいし」

その表情、あたかも曇り空模様である。

今年の梅雨前線にとつては、この国は、よほど居座り心地が良いらしい。毎日毎日、嫌といつまほどの雨を降り注いでいた。恵みの雨という言葉があるが、これほど続いてしまえばありがたみもへつたくれもない。気持ちまで湿っぽくなるし、とにかく皆、うんざりしていたのだった。

「またか……今日こそ、傘の必要はないと思つたんだがなあ

そう口を尖らせながら言つと、彼は脇に置いてある折り畳み傘に手をやつた。

「これでいいかな？」

「うんうん、たぶん大丈夫。じゃあ、いつてらっしゃい！ ほら、ミツコも……」

笑顔で頷く彼女は、抱えているミツコの右手をつかんで振りはじめた。そして、声色も似せ、

「パパ、いつてらっしゃい！」

これに、明るく答えてみせる男だ。

「ああ、いつてらるね！」

外に出た彼を待ち構えていたのは、こここのとここのお田にはかかっていない猛烈な、夏らしき口差しだった。当然のことだが、少し高く上った太陽は光を増し、先程カーテンを開けて拝んだときより数段強く、目が眩みそうなほど明るい。

それなのに、夕方にはまた激しく降るといつ。

「……はあ」

さわやかな朝の口差しには似つかわしくない大きな溜め息が、その口から再び漏れた。

その溜め息は、決して雨に降られる憂鬱さからではない。

「さてと、今のうちに洗濯して干しておかないと、ね

お見送りの後、ミツコをベッドに寝かせた彼女は、

「じゃあ、ここでおとなしくしててね！」

そう言い残したまま、すぐさま洗面所へと姿を消した。

男を送り出した後、彼女はたくさんのお類を洗濯機に放り込み、そのスイッチを押していた。

反転を繰り返しながら、ひつきりなしに泡の渦をこしらえている洗濯機。まるで、夜店で見かける綿菓子さながらである。そして、そこに見え隠れしているトップピングのような色とりどりの洗濯物たち。それらにこびりついているここ数日間の汚れが、泡に紛れて消えていく。

彼女は、小さい時からこの光景を眺めているのが大好きだった。見ている間は無心で、時間すら止まっているようだった。

だが、沈んだままの洗濯物もまた存在しているのを、彼女は知らない

やがて、最終行程の脱水が終わった。彼女は待つてましたとばかりに、その中から、一応汚れから開放されたと思われるものたちを取り出している。しかし、その中の一枚の白いカッターシャツを見た途端、いかにも残念そうな顔つきになつた。

「あーあ。襟のところの黄ばみ、残つたままじゃん。まあ、長年着ているから仕方ないけど……」

手揉み洗いをするかどうかを少しだけ迷つた彼女だが、やはりゲリラがいつ襲つてくるかわからないので、諦めることにした。それに、この程度の黄ばみにこだわつていたら、カッターシャツだけに限らず、他の物の洗い残しも気になつてくる。それらを神経質に全部洗い直していたら、あつという間にお皿になつてしまつだろう。

「時間ないからな

だから彼女は、少々汚れが残つているものでも、今日は見て見ぬふりをすることにした。

「それにしても、暑いなあ」

ベランダで額に汗を滲ませながら、何度も手を休めつつ、彼女は洗濯を終えたばかりのたくさんの中の衣類を干している。

晴天は気持ち良いし、洗濯は好きだったが、この「干す」という作業は苦手だ。とくに、強い日差しの下での家事は、朝から体力を奪われてとても疲れてしまう。

その何枚もの洗濯物の中には、先程のカッターシャツビニもではないくらい、色の変わった、古びれた下着なども混じっていた。だが彼女は、やはりそれらを気に留める風もなく

「もう、相変わらず多いなあ」

と一言だけ文句を言つと、それらも同じように干し続けた。

「ああ、暑い、暑い」

やつと干し終わり、再び居間に戻ってきた彼女。一仕事終えて、満足げな顔つきだ。

だがすぐに、

「あら? どうしたの?」

彼女は少し目を見開き、ベッドに近づいた。

「ああ、喉が渴いたんだね?」

彼女はすぐに冷蔵庫の中から飲み物を持ってきて、ミッドを抱き起こした。

「ほら、大好きなトマトジュースだよー」

そう言つて、その手にジュースのストロー付きのパックを持たせ、にっこり微笑んで見せた。

ちょうどその時、壁に掛かっている時計が時刻を知らせてくれた。時計は九つ鳴つた。

「あ、もうそんな時間なんだあ

そして、再びベッドに目を落とし、

「じゃあ、テレビでもつけようか?」

やがて聞きなれたテーマ曲とともに、いつもの番組が流れだした。

テレビのスピーカーから聞こえてくる同会者の声。忙しくまくしたてる中年男は、主婦たちの人気者だ。そのあとも、代わる代わるいろいろな人がしゃべりまくっている。もともと興奮気味の出演者の大声に加え、テレビの音量も大きいのでかなりうるさかった。けれどもそれも厭わず、真剣な顔で見入っている彼女。

「まったく、酷すぎる事件だよねえ？」

「それって親のこと？ どう思う？」「

「だつたら産まなきや いいのに、ねえ？」

テレビに向ってかどかは定かではないが、ひとしきり文句を垂れた彼女。ひとしきり文句を垂れると、疲れきったのか、そのうちにウトウトとしづじめた。

再び時計の音を耳にした彼女は、ゆっくりと目を開いた。そして、少しだけ頭をもたげ、

「ふわあ……うん？ あ、もひお昼なんだ！ そつかあ、いつのまにか寝込んじやつたんだ」と、のん気な独り言なぞ吐いている。

その後は簡単な昼食を口にし、再びお気に入りのテレビに熱中し、三時には好物のおやつまで頂戴した。

なんの変哲もない、ありふれた午後だった。彼女は家から出ることなく、何度もミックに向かって声をかけながら、テレビを相手に一人で興奮したり笑つたりしていた。

ここ数年来、まるで判でも押すように、そんな生活が繰り返されているのだった。久しぶりの晴天のおかげで、唯一洗濯こそが本日の特別なイベントといえる代物だった。

噂のゲリラが襲ってきたのは、彼女が本日一回目のおやつを平ら

げた直後だった。

ゲリラたちは、午前中なりを潜めていた鬱憤を晴らそうとするかのように、相棒である騒々しい輩まで引き連れてきた。不穏な音が鳴り響き、遠い空にピカッと亀裂を走らせて暴れている。テレビの天気予報を見るまでもなく、今夜にかけてかなり荒れそうな勢いなのは、彼女にもわかつた。

そんな彼女、ベッドを振り返つてまたもや笑顔で言つ。

「怖がらなくていいよ、私がいるからね。ミシコつて、ホントに雷が嫌いだもんね！ でも、ちょっとだけ待つてね」

そう口にするや否や、彼女は大急ぎで一階まで駆け上がった。

そうしてベランダに飛び出ると、朝、あんなに時間をかけて丁寧に干した洗濯物を無造作につかみ、どんどん取り外していった。

「ふうー、間一髪セーフだ！」

朝と同じように再び額に汗し、収穫したものを一枚一枚確認し終えた彼女は、窓の外を恨めしそうに見ながら呟いた。

「本格的になってきたなあ……だいじょうぶかなあ？ パパ」

雷はまだ遠いが、彼女が室内に入つたとたん、雨は一気にザーッと激しくなつたのだった。

彼女はしばらく、黙つたまま雨を見つめていた。

すでに時刻は七時。ゲリラは諦めるどころか、ますます意氣盛んになつてきている。このよつたな堂々とした態度を見せつけられると、もはやゲリラでも何でもない。

そんな時、勢いよく玄関が開かれる音がした。もちろん続けて聞こえてきたのは、彼女が待つていた声だった。

「ただいま！」

彼女は我に帰つたよつて立ち上がり

「ああ！ パパ、おかえり！」

と大声で答えると、玄関へ急いだ。

可哀想に彼は、何かの拍子に服を着たままプールにでも飛び込んだような体裁だ。彼女はそれを見て、玄関口で声を上げた。

「うわあ、びっしょり濡れちゃったね。やっぱり大きな傘を持っていけばよかったのかあ」

ゲリラに折りたたみの傘で応戦するのは、どうやら無理があつたようだ。

「ごめんね。今朝、折りたたみで大丈夫だなんて言っちゃった」「いいさ。それにしても、まいった。ヒカル悪いが、すぐに、二、三枚タオルを持ってきてくれ！」

彼女は額くや否や、洗面所に急いだ。

「いやあ、まさしくゲリラに襲われてしまつた」

頭をタオルで何度も拭きながら、眉間に皺を寄せている男。声のトーンも低くなり、どうやら、みづやへ落ち着いた模様だ。だが、彼の顔を一瞥したヒカルは

「そんな顔したら、ますます皺が増えちゃうよ。それでなくとも、最近白髪だつて目立つてきてるし」

「今さら、そう言われてもなあ。こればっかりは、どうもならなによ」

そう言つて首をすくめる彼に、彼女は笑顔で頷き

「そうね、仕方ないかも……じゃあ私、夕食の準備してくるね！」

ちゃんと髪の毛乾かしてね。じゃないと、風邪ひいちやうよ

そして、鼻歌混じりでキッチンに向つた。鼻歌は小さくなり、まもなく、シントンと包丁を使う音が代わりに響いてきた。

居間に一人残された男は、タオルを手にしたまま、ゆっくつと傍らのベッドに歩み寄つた。

そして、その前で跪き ベッドに向つて、いつも聞いかけている。

「こつまで続くんだろ？……」

その顔には、今までどこに潜んでいたのか、先程とは比較できな
いほどの、さらに多くの深い皺が集まつてきている。

「……なあ、光子よ？」

無論、人形は答えやしない。

まるで生きている人間にに対するように、人形に話しかけ、一緒に暮らしている。他人から見れば、誠におぞましい光景だろう。無論、彼も最初は戸惑つた。けれど、今はもう、それは当たり前のことをとして、家族の日常に溶け込んでしまつていいのだった。

彼は一言一言噛みしめながら、さらに人形に語りかける。

「三年前におまえが死んでしまつてから、ずっとあの調子……」

彼はふと、部屋の隅に置んで置いてある、洗濯物の山を見た。

「そうか……今日は、晴れていたからな」

その中には、今はもう主のいなくなつた衣類たちの姿が見え隠れしている。彼女は、また次の晴天のときも、それらすっかり傷んで古くなつてしまつた衣類を凝りもせず洗濯機で回すだらう。それは、この三年の間、当たり前のようになつていている。

彼は、それを止めさせる非情さを持ち合わせてはいなかつた。ただ笑つて、彼女がしたいようにさせてやる。それしかできなかつた。優しさ、この一言で済ましている現実。

そして彼女の知らないところで、毎日何度も同じ言葉を吐く。彼が子供の頃いつまでも笑い続けていた傷が入つた、そんなレコード盤のようだ。

「いつまで続くんだろ？……」

どれくらい時間が経つだろ？。台所から明るい声で

「パパ！」「はん、出来ましたよー！」

と呼ぶ声がした。

これに、我に返り

「あ……ああ、今行くよー」

「」の叫んだ後、父はゆっくりと重い腰を上げた。けれども、離れ際にもう一度だけ人形の方を振り返った。

そして悲しげな眼差しで、まさに独り言のようの一言声をかける。

「早く、あんなヒカルを何とかしてあげなこと……な」

底に沈んだままの、その周りだけ時が止まっている そんな不憫な、いや、だからこそ、父にとっては愛しくてたまらない娘、ヒカル 父が名付けたその名前は、母の名から一文字とつたもの。（ア）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8269m/>

続 明るいホラー

2010年10月8日11時44分発行